

日本靈異記上卷第二話成立の問題点

——主として外婚説話上から——

長 野 一 雄

日本靈異記の上卷第二話に、三野の国大野郡の男が狐と結婚する話がある。妻となる女を求めていた男が、広野の中で美しい女と会い、意気投合して家庭をもつが、犬にはえられて驚き、野干となつて垣根の上へ逃げたという荒筋の説話で、男はそんな女を見ても愛情をもつて語りかけ、「毎ねに來りて相寐よ」といつたので、その後も女はやつて來て寝たというのである。

この話は動物との婚姻を語る外婚説話であるが、記紀・風土記・万葉集などに記載されている他の外婚説話を読んでみると、靈異記の説話の外婚説話としての特質や、成立状況について二・三の考える点があつたので記してみたいと思う。

一 外婚説話の分類と特色

外婚説話というものを結婚のありようから考えて分類した場合、一例として次のような分け方ができるのではないかと思う。

(一) 動物と結婚したという体験を語つていて、結末に破綻がないもの。

これには

1 相手が誰かはつきりせずに結ばれているもの。

2 相手が一応わかつていて結ばれているもの。

の二種がある。1は記の三輪山説話で、夜毎に通い来る男と関係し、まだあまり時も経たないのに懐妊したことをあやしく思い、男の所在を探るために、着物の裾に糸を通しておいて調べたら、三輪山へ至つていたというのみで、それ以上の話はない。2は万葉集の浦島子伝説と風土記逸文山城国条の宇治橋姫の説話で、前者は海宮神の女と共に暮した浦島子が、神の女と別れて元の地へ帰る話で、神の女と特に結婚生活上破綻があつたわけではない。後者は竜神に愛されてその婿になつた男が、何年か竜神と暮した後、再び元の妻の所へ帰つて一緒に暮す話で、この場合、竜神との間にも妻との間にも、これといつて破綻がなく丸く納まつている。

(二) 動物と結婚するが、結末に破綻のあるもの。
これには破綻の形式に三種の型がみられ、

1 動物によって殺されるもの。

2 男女共に愛する心は変わらないのに、一方がタブーを犯したため、二人の仲が破綻するもの。

3 2と同じく二人は愛し合っており、しかも直接タブーを犯したのではないが、別の外的条件が加わって、そのため間接的にタブーが犯されて、二人の仲が破綻するもの。

がある。1は肥前風土記松浦郡条の褶振峯説話がこれに当る。弟日姫子が蛇の男と交わり、結局その男によって沼へ引きずり込まれて死ぬという悲劇的結末をもつ話である。2は紀の三輪山説話や海宮神豊玉姫の説話がこれに当る。後者では別れてからも恋しさにたえず、愛の歌をかわし合っている。3は靈異記上二の説話がこれに当る。この説話はいったん別れてからも愛する心が強くて女は通ってくるし、男は愛心を歌っているというところで、豊玉姫説話と類似しつつも、それよりさらに発展した内容を示しているものと思われる。

ところで、このような外婚説話においては、主人公の動物に共通する特色として、いずれもが神と関係をもっていることが第一に注目できる。それには二種の型が考えられるが、

1 動物が神そのものである場合。

2 動物が神そのものとは断定できないが、神の使いの役目を果すような存在である場合。

の二つである。1には三輪山説話や豊玉姫説話や浦島子説話がこれに当る。三輪山説話は蛇神大物主神が主人公であり、豊玉姫説話では「於是海神之女、豊玉昆壳命」とあって「神之女」であ

るし、浦島子説話では「海若。神之女」とあって、前記と同じである。この「神之女」という表現から考えると、神でありながらも、これら女性は人間界と通じる神の代理としての使いの役目を果していることが予想できるように思える。三輪山説話の場合は「此謂意富多泥古人、所謂以知神子者、……故、知其神子」とあって、「意富多泥古」が神の子として、三輪山の神と人間界の間をとりもつ神の使いの役目をしているのではなからうか。

2に当るものとして神武東征説話の八咫鳥や、倭建命の伊吹山の神を退治するときに出てくる白猪がある。前者は八咫鳥が、「今自天遣八咫鳥。故、其八咫鳥引道。」とあることく、案内として天より遣わされ、神の使いの働きをしていることがわかる。後者は「是化白猪者、其神之使者」とあって、白猪が山の神の使いの役目を果していることがわかる。

このようにしてある種の動物が、神の使いとして人間界とかわる役目をもたされていることが指摘できるが、それら特定の動物の中に狐を入られるのではないかと思う。古事記・風土記の中には狐の例がなく残念であるが、書紀齊明天皇三年と五年とに各一例が伺える。前者は「石見国言、白狐見。」とあり、後者は「狐嚙断於友郡役丁所、執葛末而去。」とある。これらの表現は特に変わった意味深さを示してはいないように思えるが、それでも狐が何か特別な動物として扱われていることが感じられるように思う。殊に白狐は延喜治部式に上瑞とみえていて、吉祥を示す霊的な働きをするものと考えられているが、平安から中世へかけての説話集の中では、狐の靈力を示す話にこと欠かない。例えば

靈異記下の第二話に狐につかれた病者の話があり、今昔物語十六卷十七話に良藤という男が狐に化された話があり、古今著聞集第二十の六七六話にも狐が靈人につく話があり、また同じく第十七の六〇六話に吉事を告げる約束をする狐の話がみえる。いずれにしろ狐が靈力をもつものとされていることは納得できるが、古くから狐が稲荷神とし、お稲荷様といわれて信仰されてきたことはこの際注目しておくべきことと思う。このことについては柳田國男などの指摘があげられる。柳田は「おとら狐の話」の中で、稲荷をミサキという例が京都にあると指摘し、ミサキとは神の先に立ち、平民を畏服させていた小社の神でオサキの名もこれから起っていると記し、狐が神の使いの役目をしていることを教えている。また近藤喜博は『古代信仰研究』の中で、「……空を翔る鳥と地を走る獣との相違はあれ、狐が東国方面で山ミサキと呼ばれたことは、カミの神意の伝達者として、狐の立場も、鴉同様に重要視されてはなくてはならぬ。」(P284)と記している。

こんなわけで、わたしたちは外婚説話に出てくる動物は、男にしろ女にしろ神そのものとして扱われているか、神の使いとしての性質をもつものかの二つに分類できると思うのであるが、このことが靈異記上二のような説話の場合、ある種の注目すべき働きをもって利用されているように思うのである。しかしこれはまた後に問題とすることにし、もう少し外婚説話の本質を追永してみたいと思う。

二 外婚説話の本質

外婚説話には結婚して子の生まれている話のものがある。しかし科学的常識をもってすると、人間と蛇や狐との間に子供のできるはずがない。この素朴な考えをもって判断すると、こうした子供のできる説話は、現代感覚では処理できない発想によって生まれたものと考えるほかはなく、してみると古代特有の観念、つまりは古代信仰に基づいて生まれてきたものとするほかないのである。

この観念に立つと、二つの考え方ができるのではないかと思ふ。

その一は、子の生まれている点からして、生産の豊饒を祈る神事と関係があらはしまいか、という考えである。ところがこのタイプの説話では生産の神事と関係があるというらしい根拠を示す点に乏しい。いったい子が生れたり妊娠したりする説話には、豊玉姫説話・記の三輪山説話・靈異記上二の説話・風土記逸文近江国糸伊香小江の説話などがあるが、異郷人との婚姻によって末めでたく栄えるといった感のもので、例えば豊玉姫説話に出てくる隼人の歌舞も、生産と関係あるとは思えず、争いの征服、邪霊の征服と関係のあるらしい説話である。そこでわたしはこの考えを棄てたいのである。

その二はトーテミズムと結びつける考えである。

松村武雄は『日本神話の研究』(第三卷)の中で豊玉姫が出産の時わにの形になってはらばっていることを、南洋方面の諸部族にみられる例から検討して、トーテミズム信仰と関係することを詳細に説き、「トーテミズムの体制・信仰を有する部族に於ては、

各氏族の成員が、種々の場合——殊に呪術宗教的儀礼の実修に際し、極めて一般的な準則として、自己のトーテムたる動物の外的形態を体現しようと努める。」(P. 714)と記している。

この考えをとると確かにこれら外婚説話は納得しやすい。例えは靈異記上二の説話で、犬にはえられて狐の姿となり垣根に上ったというのは、トーテムの靈力によって犬を追いはらおうとしているのではないかと思えるし、伊香小江説話で天の八女が白鳥となって水浴していたというのは、白鳥族の乙女が何かの宗教儀礼をしていたのであって、天の羽衣をとられたということは、もはや白鳥族になりえぬ運命に陥ったと考えられ、部族の掟に従って、乙女の一人はとった男性と結婚したのだと思われる。

また外婚説話群中、子の生まれないものでも、例えば風土記肥前松浦郡条の習振峯説話で、主人公弟日姫子の所へ夜毎に来た男が、「到此峯頭之沼辺」有寝蛇「身人而沈」沼底「頭蛇而臥」沼脣「忽化為人」とあることから、男は沼の辺に居を構えている蛇をトーテムとする者で、頭にそのことを示す覆面のようなものをつけていたことが予想できるのである。

以上のようなことから、先に記したわが国の外婚説話がトーテム信仰によって生まれてきているものと考えたいが、このことから、一で分類した外婚説話の結婚のありようの違いから、さらに次のようなことが考えられてくる。それは、どうして外婚説話は破綻しがちなのか、という疑問とその解答である。

わたしはこれを生活の実態をそれとなく物語っているものと考えたいのである。このことは外婚説話のもつローマン性となが

つてくることであると思ひますのである。

すなわち、古代社会において、ある部族の人間が、他部族でトーテムをもつ異なった信仰形態の異性と結婚した場合、風習の違いから二人の生活には多大の困難点が横たわっており、障害が起りがちであり、悲劇悲話が始りがちだったのでないか、さらに考えると、外婚説話に悲恋・悲話が多いのは、そういう他信仰部族との結婚をしていかざるをえないような宿命をもった社会を背景として生まれているからではなからうか、悲しみの度合は、そういう宿命を背負っているから深く、これが人口にかいしやした話となっていくのではないか、と思うのである。

例えば、男の少ない部族の女性は、他部族の男性を探しにいかなば、一夫多妻に甘んじるほかに、女の少ない部族の男性は、他部族の女性を探しに行かねば、逆に女性の支配に屈せざるをえないのである。外婚説話に出てくる男や女は、いずれもが、またはいずれか、一方が、そのような現体制を乗り越え、冒險しようとした男や女であり、このためなにかしら英雄行動的であり、ロマンチックな悲哀が漂うのではないかと考える。これを歴史上から考えると、外婚説話は氏族共同体の血縁社会が崩れていく年代に生まれてきたものではなからうか、ということになる。そしてこのような障害多い結婚形態が、

1 完全に失敗するもの。

2 世間体上は失敗となっても二人の愛心深く秘かに逢瀬が続

けられるもの。

3 めでたく成功するもの。

といったぐあいに、幾種かの型の外婚説話を生むことになるのではないかと思われる。

今ここに、外婚説話の成立順を臆測してみると、悲劇性は時代が古く、信仰の絆が強いほど強くなることが予想されるので、まず最初は完全にうまくいかない型の説話、すなわち風土記肥前松浦郡条の習振家説話が該当し、次には、厳しい第一の型の説話に對して、時代とともに他信仰部族との結婚が一般化していくことが考えられるわけで、この観点から結婚ははっきり許されるが、信仰の違いからタブーが合わず破綻する型の説話である豊玉姫説話や書紀三輪山説話が該当し、第三には、同じく結婚は許されるが、直接タブーは関与せず、他の外的条件によって二次的にタブーが犯されて破綻するものが考えられ、靈異記上二の説話はこれに該当する。第四には、結婚して別れることにはなるが、別に破綻のないもので、記の三輪山説話や風土記逸文山城国条の宇治橋姫説話はこれに當るが、別れているということはやはり何か具合の悪い障害のあったことが考えられるので、第二・第三例と関連するかも知れない。しかし一方、破綻の状況が記されていないところから考えると、外婚説話の主要個所はぐらかされてぼやけていることは疑いのない事実であり、年代の新しさが感じられるのである。

以上のような成立順に、あまりこだわる必要もないが、わたしは靈異記上二の説話が、豊玉姫説話の影響を受けて生まれているものと臆測したい。すなわち歌を入れて結びとっていく形式の影響である。古代の生活からすると唱和の形をもつのが自然なこと

でありそうにも思え、男性だけが歌っている方にかえて新しさが感じられる。しかも靈異記上二の説話は、男が自分の家へ女を連れて来ており、男が女に對し「……毎に來りて相寐よ」といい、男の方に主導権があるものとされる。一方豊玉姫説話は、女の方の力によって火遠理命が兄の火照命に勝った話であり、女の方から子を産みに来て、女の方から去って、女の方に主導権があるものとされる。このような話の姿からして、靈異記上二の説話に新しさがあるように思うのである。

三 外婚説話と氏族系譜

先の章の冒頭に、外婚説話には子供の生まれるものがあることを指摘したが、そのことに關して興味深い一致点があるので記しておきたい。

それは説話の終りの方に、氏族系譜がつくという特色である。

例えば豊玉姫説話では、子を産んでから姫が帰っていく文の後、「是以名_三其所_三産之御子_二、謂_三天津日高日子波限建鸕草葺不合命_二」とあり、少しおいて、「是天津日高日子波限建鸕草葺不合命、娶_三其姨_二、玉依毘売命_一、生御子名、五瀬命。次稻永命、次御毛沼命。次若御毛沼命、亦名豊御毛沼命、亦名神倭伊波礼毘古命……。」となっており、第一代の天皇へつながる系譜を示している。

次に三輪山説話では、糸が美和山に至っていたという後に、「故、知其神子。」とあり、少しおいて終りに「此意富多多泥古命者、神君、鴨君之祖。」と記されている。

次に靈異記上二の説話では細かな系譜はないが、「亦其子姓負直也……三乃國狐直等根本是也」とあつて、一括して狐を先祖とする氏族のことが示されているのである。

最後に伊香小江の説話では、「遂生^三男女^二 男二女一 兄名意美志留 弟名那志登美 女伊是理比咩 次名奈是理比売 此伊香連等之先祖是也。」と系譜の一端が記されている。

それでは、このような子の産れた外婚説話において、どうして氏族の系譜がきまつてついているのかと考えてみると、まず最初の章で記したごとく、結婚した相手の動物がすべて神または神の使ひであるということが注目される。(伊香小江説話は天女が白鳥になっていたもので、「因疑^三若是神人乎^二 往見之 実^三是神人也。」とある。)このことは、先祖がそういう神人または神の使ひであるということを強調しようとしているわけであつて、そのように示すことによつて、自己の氏族の尊貴さを認めてもらいたいからなのではないかと考えられる。つまりもつと追求すると、神人または神の使ひの子孫とは、天皇家とゆかりがある氏族であり、そのことを認めてもらいたいわけなのである。

では、なぜこうしたことが示されねばならないかという点、氏族改変整理の歴史事実と関係していると思う。記紀の允恭天皇系に氏族が乱れていることを指摘し、特に書紀では、「群卿百寮及諸国造等皆各言、或帝皇之裔、或異之天降。」とあり、諸氏族が祖先を皇室に結びつけようとした風のあつたことを記している。

これらのことは阿部武彦『氏族』(日本歴史新書P52〜P53)に指摘されているが、上記外婚説話の氏族系譜もこれと似通つたこ

とであると思われる。

そこで、このことを靈異記上二の説話に限つて考えてみると、「狐の直」とあること、説話の冒頭に「昔欽明天皇御世」と記してあることから、允恭天皇後のことであるから、欽明朝以後にあつた氏族制度改変の時代、すなわち天武天皇の時代に、それ以前あつたとみられる「カバネ」制において認められていた「狐の直」というもののいわれを明示し、新しい氏族制度において、その尊貴さを認めてもらうことをねらつて作られているのではないかと思ふのである。特にこの時代は、天皇家を中心とする国家体制を再編成し確立しようとした時代で、神道の復興がみられ、それ故、こうした時代思潮が、「狐の直」のような神と関係する氏族をも動かしているのだと考えられるのである。

以上の観点から、靈異記上二の説話は、天武天皇の時代に一応完成されたものと判断したい。

四 靈異記上二における犬と歌

最後に靈異記上二の説話に出てくる犬と歌が、後に入れられた作意のしろものくさいことを指摘してみたい。

この内、後者の歌のことは、古代作品の通例のようなものだから、今更改めていうこともなからうが、「恋は皆我が上に落ちぬ」といい、「たまかぎるはろかに見えて」といい、表現がある程度磨かれており、特に「たまかぎる」という枕詞は、記紀歌謡になく新しさを感じさせるといふ点、万葉集卷十一の二三九四、十二の三〇八五番歌「朝影にわが身はなりぬ玉かぎるほのかに見えて

去にし子ゆえに」と、類似性をもっている点、などから、少なくとも万葉時代の歌とされるので、おそらくこの説話が一応完成されたとみる天武天皇頃の時点において、入れられたものとみられるのである。

次に犬のことであるが、この点に関して少々すっきりしない点を感じられる。それは、元々男の家に犬がおり、その犬の方は狐女にはえる形跡がなく、その犬の生んだ子犬がほえたために狐女が驚くということである。常識的には新たに生まれた子犬はかえって人慣れしやすく、途中から接した親犬の方が狐女にとっては慣れにくいはずなのに、その逆になっているのはどうしてだろうか。子犬の方が何か霊力が強いという観念が古代にあったのだろうか。とそう考えてみても、資料の中でそうした例にあまりぶつからない。そこでわたしにはこれが作意のこらされている一つの点だと思えるのである。というのは、親犬は元からいるのだから、これがほえるのだとすると、狐女は男の家へ来た最初からほえられていつけないことになり、子もできないでしまうかも知れないのである。それでは子孫ができないことになるから、「狐の直」の系譜を語る説話としての意味をなさなくなってしまう。このように考えてみると、生まれた子犬にほえさせていることは、子孫のことを引き出すために作ったことだといえそうに思える。その傍証として、この説話の発展した形の御伽草子「木幡狐」になると、犬は狐女の産んだ子が三才になった時献上されたとなっており、納得いくようにうまく作られているのである。靈異記上二は、氏族の存在を顯示することに中心力点があり、このこと

ために少々下手な作意がこらされていると思うのである。ついでにどうして犬がこんなところで用いられるのかと考えると、日本では万葉集巻七（三六九）に「垣越しに犬呼び越して鳥獵する者青山のしげき山辺に馬やすめ君」とあり、犬は獵に使われたということがわかるくらいの例しかないが、中国の搜神記にある「千年の狐」という説話で、書生に化けた狐の正体を破ろうとした葉という男が、犬を用いてけしかけたが破れず、「これは真の妖怪に相違ない。化物は犬を嫌うが……云々」（平凡社中国古典文学全集）とあり、また「統古事談六 漢朝」に、白楽天の「任子行」に狐が女に化けて男に嫁したが、狐に行く時連れて行ったよき犬が、「コノ女ノキツネナル事ヲ知テ、トピアガリテクヒ（ヲ）トシテケリ。」とあつて、とにかく中国から流入した観念と知られるのである。

このような中国観念の流入からしても、原説話においてあったものと思われず、一応完成された時点において考えられたものとしたいのである。

以上によってわたしは、靈異記上二の狐説話は、神の使いとしての子孫の尊貴さを示そうとしたものであり、原説話は外婚説話の一つとして、氏族共同体の血縁社会が崩れていく時代に成立したもので、他信仰氏族との結婚の破綻を語る悲話であったものが、氏姓改変の天武朝頃に、自己氏族の誇示のために、神観念復興の時代思潮を背景にして、改作完成されたもので、作者景戒の目にとまり、奇異な話という少しずれた別の観点から、「靈異記」に書きとめられたものと考えるのである。